

黄表紙にみる外食文化

東京家政学院大・院

山本 聖子

[研究目的]安永 4 (1775) 年～文化 3 (1806) 年の 32 年の間に、2000 作品以上の黄表紙という江戸の文学作品が出版された。黄表紙には、江戸における食文化に関する記述が、絵にも文章にも多く取り上げられている。黄表紙は、江戸を中心とした当時の庶民の生活文化を知る貴重な資料であると考え、黄表紙と江戸の食文化について調査をおこなった。黄表紙と食の関係について扱った研究は、管見の限りいずれも黄表紙のごく一部分について述べたものであった。そこで、本研究では黄表紙全体の食の傾向をつかみ、黄表紙における食の特徴を明らかにしたいと考えた。

[研究方法]東京都立中央図書館加賀文庫に所蔵されている黄表紙、1197 作品中、食を表題とした 42 作品と、すでに翻刻されている作品を合わせ 134 作品について調査を行った。

[結果・考察]黄表紙作品中の食の記述について、茶屋の記述が多く見られた。また、当時流行したと思われる蕎麦・蕎麦屋・蒲焼店・天ぷら屋・茶漬屋・即席料理店などの記述がみられた。食品では、山の芋と鰻、芋と蛸など俚諺と精力剂的意味、男女の色事を暗示させる内容とをかけ合わせたものも多くみられた。今回調査した黄表紙作品中の食の特徴としては、日常の食を取り上げるというより、外での食事を中心とした記述が多かった。また、店名などが実名で取り上げられていることから、黄表紙がグルメ案内的な役割をになっていた、と思われる。